

いから應援をすることな事で組合は争議許りやつてゐる様に汚名を着せられる。僅か十名の争議であるが負かしてはならぬと言ふ事は九聯のみでなく労働者の一つの精神である軍需インフレで一割以上の配當をしてゐるが労働者の實質賃金は少しも昇つてゐない、最近では臨時工を多く使つてゐるが之は臨時工のみの問題ではない高給者役付の常備工を合理的に臨時工と入れかへる事は事實である、國家に於ては之を憂慮して解雇積立金制度等に因關する法律を作らうとしてゐるが資本家は労働者を無視して反對してゐる。又國際労働會議に於ても七時間労働制が出されたが日本の資本家代表は未だ日本は技術術が進歩してゐないからと之に反對した、然るに今日日本商品は投資りであるとして賃金を多くし、労働時間を短縮せよと抗議して來たのに對し

日本は智能と技術が進歩してゐる爲だと言つてゐる、餘りにも我儘である事を痛感するが歸する處労働者が利己的であつた爲である。

建實な組合が指導するストライキは決して暴動化した事がない吾々は刀を抜かず産業平和に協力する事が使命であるが、頑迷なる資本家には斷乎として闘ふものである、問題の如何に依りては、如何なる決意をもする、誠意を持て來るならば何時でも解決さす用意と覺悟はしてゐる吾々の苦しみ立場と誠意を汲取つて本争議勝利の爲に援助されたい。

3、閉會の辭

司會者

宮崎 太郎